

養護教諭養成教育における養護実習

— 第2報 S T A I 検査にみられる養護実習 —

小林 壽子 ○大西真由実

Education for Nursing in the Training Institution for Nurse Teacher

緒言 養護教諭養成教育に携わる者として学生の教育にはカリキュラムを始め、学内、学外の実習、講義、その他大学行事等を通して配慮する処が大である。この事は教育を預かる者として当然であるが、日本学校保健学会の共同研究班も、1989年に養護教育の目標として「卒業直後であっても、養護教諭として活動できる基本能力を形成し、専門職業人としての社会的責任の自覚、生涯にわたり自己教育を行える能力・態度を形成すること」と述べ、更に「養護実習は養護教諭養成教育のカリキュラム全体を通して推し進めていく要の位置にあり、又、それ迄の学習成果がそこから流れ出す源となる」¹⁾と述べている。従って、養護教育においては、養護実習が他の教育方法と異なる特性—実地の現場に臨んで実地に実習すること—を十分に生かし養護実習の体験を、養護教諭職に対する認識を発展させる機会として指導していくことが望まれる。

そこで第一報では「教育職員免許法の一部を改正する法律」が公布され施行された1989年を機に、新課程を受けて本学もカリキュラム上幾つかの変更を行った。その事が養護実習に如何に現れたかについて、報告を行った。

今回は心理テストの一種であるSTAI検査^{2) 3)}を実施し、そこに現れた学生1人1人の心理状態の変動が、養護実習に如何に現れたかを研究する事によって、今まで見えなかった深層部分が明らかとなり、今後の養護実習事前・事後指導(1単位)を含む教育の在り方及び実習校との関係においても、幾つかの知見を得たので報告する。

I. 研究方法 今回の研究は養護実習という学生の出身小学校、中学校、高等学校のいずれかにおいて実施する学外の実習の形態のもとに、3週間の期間中での各週毎の学生の「心理状態」を、学生自身の記入により集計を行った。これをもとに更に実習校での学生に対してなされた「評価」及び養護実習での学生の「実習内容」等との関連について研究を行った。

1 対象：本学養護教諭・福祉コース2年生48名

2 実施期間：平成7年4月～6月の3週間及び養護実習

第1期開始の4週間前 3 方法：学生の心理状態をSTAI(自己評定質問紙法)に記入することで行った。

II. 研究結果 1 STAIの個人特性平均：図1はSTAIの個人特性平均を点で表したものである。その総数の平均値は58.3である。即ち図1で示されたように55～60に最も多く点入しているのがわかる。

2 STAIの類型：特性結果を事前、1週目、2週目、3週目(終了日)を横軸として、48名を類型化したものが、図2(1)である。10型に分類された。この10型を類似特性型に分類すれば次のようになる。A型：1, 8型(次第に減少していく型)、B型：4, 10型(上昇あるも下降していく型)、C型：3, 5, 9型(同上の変形)、D型：6, 7型(下降あるも上昇していく型)、E型：2型(次第に上昇していく型)

III. 考察 事前より始まり途中の上昇はあるが実習終了時には下降しているA, B, C型は、安堵、開放感、充実等が考えられる為、心理上問題がないとみなされる。しかしD, E型においての上昇は問題が考えられる為、特にE型について特記してみたい。4名に共通する事項として実習時期がIV期である。実習校種は1名を除き中学校である。更に2名はSTAIの総合平均が最高である。保健指導が4名共、課せられていたが学内での「ミニ模擬保健指導」を実施したのは1名のみであった。実習校からの実習評価は1名が「A」であったが3名は「B」であった。

IV. 結語 短期大学での教育に於いて、学生の学外実習は、1年余りの教育期間で実習開始という極めて厳しい現実の上に立てなされている。この為学内の教職教育及び専門教育が終了しない状態であり、学生自身だけでなく教育機関にとっても、不安、緊張が漂っている。その為現在迄に於いて、本学が「カリキュラム」上のみならず時間外の個別及び全体指導を、様々な面から試み検討を加え研究としてきた。今回の「STAI検査にみられる養護実習」として特筆すべき事項を列記する。

1. STAI検査の結果事前の特性は、実習開始と共に低下するが、2週間目には上昇し、終了時には事前よりも更に低下した。即ち緊張からの解放とその上にくる充足感とみなされる。2. 実習校での評価については「C」は該当者なしで、65%は「A」であり、小学校での実習生に多くみられた。3. 特性が実習経過につれて上昇した者は、実習内容及び児童・生徒との対応についての緊張がみられ、最も強い事項として学級に於ける「保健指導」が考えられた。4. 学内での「事前指導」を残し実習が開始された学生は、前半に於いて特性はみられたが、後半は必ずしもそうではなかった。5. IV期即ち前期実習の最後のグループであったにも拘わらずE型に属する4名は、実習経過と共に特性も上昇していった。このことは本人の努力が実習校に於いて、充足されなかったと考えられる。

参考文献 1) 小林壽子：養護教諭養成教育における養護実習 第1報免許法改正後の教育と養護実習 鈴鹿短期大学紀要第15巻 1995年 91～99 2) 河野友信他編 心身医学のための心理テスト 1990年 27, 28 朝倉書房 3) 中野克治他 新しい不安尺度STAI 日本版の作成 1982年 108～110 心身医学 22

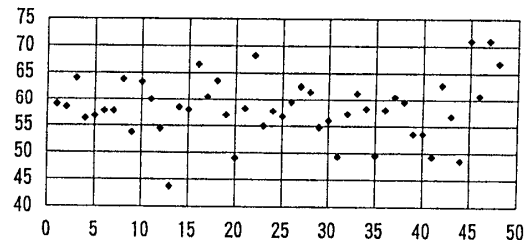


図1 STAIの個人特性平均

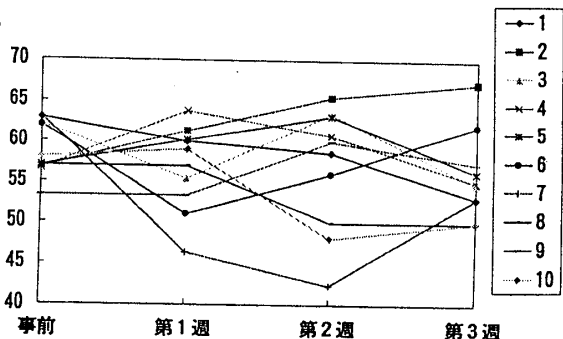


図2 STAIの類型(1)